

耶 麻

令和 7 年度 第 3 号
[通 巻 1 4 2 号]
耶 麻 地 区 小 学 校 長 会
令和 8 年 2 月 2 日

巻 頭 言

学校経営あれこれ

「教師も学び合い」

耶麻地区小学校長会副会長

喜多方市立熊倉小学校長 武藤 盛男

「次の授業の展開で悩んでいるんですが。」放課後の職員室での一コマである。ミニ事前研究会のように自然に会話がつながる。そして先輩の先生方から過去の展開例などの話題が続く。本校も若手職員の比率が高くなってきている。単学級のハンデの中、若い先生方は子どもたちの学びを深める授業展開をいつも真剣に考えている。それに応え、授業等の悩みを共有できる職員室の雰囲気、風通しのよさがあり、一人一人の子どもたちを互いに理解しているからこそ内容も深まる。互いに良い刺激を受けながら、目の前の子どものために懸命に向き合う先生方の熱量に頼もしさを感じる。

自分もこれまで多くの先輩・同僚に恵まれ、成長することができたことに感謝しかない。特に若手の頃は授業は反省しきりで、力の無さを示すようで、先輩の先生方に教えを請うことも遠慮していた自分がいた。そして、何よりも多忙の中で常に担当業務や生徒指導等に追われていたようにも思う。子どもたちに対してすまなかったと反省することもしきりである。

今こそ同僚性を高め、授業等の悩みを臆せず話題にできる職場であってほしい。学力向上対策として各校での具体的な取組が求められているが、本校はその打ち手の一つが「いつでもどこでも教材研究」というものだ。仕事は見て学ぶ面もあるが、先生方の「学び合い」の雰囲気をさらに醸成するためにも、気軽に悩みを交流し、しっかりとつながることが重要と考える。

先生方にはそれぞれ強みがある。校長としてそれぞれの強みを活かし、伸ばし、結果として子どもたちの力を最大限に引き出すことが責務である。私も自ら学び続け、拙い実践を伝える中で、少しでもチームとしての「学び合い」を深めていければと思う。

「子どもの笑顔求めて」

喜多方市立第三小学校長 佐瀬 俊英

ある小学校に勤務した教頭時代。子どもたちと向き合う中で、私は改めて授業の大切さを実感させられました。毎日、交流していた子どもたちは「教室にいたって、授業が分からないからつまらない。」と話してくれたのです。子どもたちは自分たちの居場所と授業の中で「分かった。できた。」といった満足感を求めているのです。その子どもたちとの生活から、私は『子どもたちの笑顔』を大切にする学校づくりを強く意識するようになりました。

そして今も、私は校長として、子どもたちが毎日、笑顔で安心して学校に通える学校であるために、「授業が楽しい。」「先生とふれあえるのが楽しい。」「友達と遊んだり勉強したりするのが楽しい。」等と思えるような自分の居場所がある、楽しい学校をめざしています。

この4月、学校が変わり、今の学校の現状を見てみると、いくつかの課題が見えてきました。そこで、先生方と話し合い、この1年は子どもたちのその課題解決に力を入れていくことを確認し、全職員でその解決に向けての取組を始めました。みんなの思いが一つになり、進む道は少しずつ開かれ、子どもたちの笑顔を見る機会も増えてきました。

4月から先生方と一緒に取り組んできたのは「確かな学力の定着」と「自己効力感・自己肯定感の育成」です。これからも、子どもたちが「学校が楽しい」「授業が楽しい。」そして、「自分に自信をもてる」ように、先生方と一緒に取り組んでいきたい思います。

子どもたちのたくさんの笑顔求めて。

学校経営あれこれ

「かながえる」

喜多方市立関柴小学校長 佐藤 潤

令和7年度の学校テーマは、「自ら考え、行動できる子ども」を育みたいという保護者と教職員の共通の願いから、「考える」としました。

第1学期始業式

かえるは、オタマジャクシから手足が生え、大きくジャンプするという成長過程を持ちます。この姿に、子どもたちが「考える」ことを通して集団生活の中で磨かれ、学力、体力、対応力を身に付け、未来へ向かって大きく跳躍してほしいという願いを重ねました。「かえる」という言葉の語呂合わせから、キャラクターをかえるとし、教職員で「カン・がえる」をデザインいたしました。「カン」は、各学年が取り組む目標として、以下のような願いを込めました。

1年：菅、2年：関、3年：感、
4年：貫、5年：関、6年：鑑、あゆみ：完

第2学期始業式

テーマ「カン・かえる」には、「かえる（変える）＝チェンジ」という挑戦も込めています。子どもたち一人一人が、頭（学力）、心（対応力）、体（体力）の3つのうち、最低ひとつでよいので、2学期は1学期よりも自分自身を「変える」ことに取り組み、具体的な目標に向かって努力することを啓発してきました。

第3学期始業式

テーマ「ふり・かえる」は、1年間の締めくくりです。現在、子どもたちは中学校進学や次年度の進級に向けて、学力、体力、対応力を着実に身に付けている「現在進行形」です。

まさに今、大きくジャンプする準備の最終段階です。がんばる子どもたちのために、教職員一同スクラムを組み、全力で教育活動に取り組んでいるところです。



学校経営あれこれ

「地域と共に考える経営ビジョン」

喜多方市立堂島小学校長 橋本 淳

学校経営の根幹となる学校経営・運営ビジョン作成に、毎年頭を悩ませています。毎学期末に教職員で話し合うビジョンの反省や学校評価を見返し、校長としてどのような学校にしたいか考えますが、適切な表現が浮かびません。

8月29日（金）に市内の校長先生方が集まり、CS研修会が開催されました。文部科学省総合教育政策局CSマイスターの安齋宏之先生の講演を拝聴しました。その中で「山積する学校課題解決には、校長のリーダーシップは欠かせない。しかし全てを一人でできるわけではない。受援力も必要。」というお言葉がありました。その言葉と演習が、私にとってビジョン作成への大きなヒントとなりました。

本校で秋に行うCS会議は熟議です。この場を活用し、先生方や保護者・地域の方とともに教育目標を見直してみようと考え実践しました。実際話し合うと、様々な思いが溢れ、キーワードをたくさんいただきました。全てのキーワードから、子どもの「笑顔」が浮かんできたので、「生き生きと活動する堂島っ子」という教育目標を次年度は「笑顔あふれる堂島っ子」に変更しました。言葉を見ると一部が変わっただけに見えますが、学校・家庭・地域の思いが詰まった教育目標に仕上がりに、これまでにない充実感が味わえました。

今年のビジョン作成は、校長として学校経営を考える際の大きな経験となり、私の財産のひとつとなりました。



学校経営あれこれ

「たくさんの方の支えられて」

喜多方市立熱塩加納小学校 黒子 学

令和7年4月に熱塩小学校と加納小学校が統合し、熱塩加納小学校が誕生しました（パチパチパチ）。加納小学校に着任した当初、統合については令和9年度の話であり、まだまだ先のことと悠長に構えていました。ところが令和5年の秋も深まった10月下旬に統合へ向けての話があれよあれよと進んでいき、令和7年度の統合へ向けての準備がスタートしました。統合まであと1年と2カ月しかない中、本当にできるのか正直とても不安でしたが「やるしかない！」と覚悟を決め統合の準備を進めていくと…校歌や校章、運動着、スクールバス等決定しなければならないことがもり沢山。父母と教師の会の組織や規約作りのために両校の役員の皆様に集まってもらったり、新設校の教育課程を新たに編成するために両校の先生方で合同会議を何回も行ったりしました。また、備品や集金関係、予算面など事務の先生方にも大変お世話になりました。

今、思い返してみるとよく令和7年度に間に合ったなと思います。これもひとえに統合委員会、保護者、地域、校長会、熱塩小、加納小の職員等たくさんの方々のおかげです。

学校は、校長だけでは動かすことはできません。本当に周囲の方々に助けていただきました。人と人との繋がりや絆の大切さに改めて気付かされた1年と半年でした。この統合という貴重な経験を今後の学校経営に生かしていきたいと思っています。ということで校長先生方、これからもお世話になります。どうぞよろしく願いいたします。



話の小窓

「TOKKATSU」

喜多方市立豊川小学校長 樋口 喜敬

30年前の教職10年目の頃、勤めていた学校で小教研特別活動の地区大会を受け、現職教育として全校で特別活動を研究した時があった。私は、5年生の担任で学級活動の話合い活動（1）の授業を提供した。その頃は、若い自分が授業をやるしかないかぐらいしか考えていなかったが、今思うと学級経営の基礎となる勉強ができたと思う。

今年、小教研特別活動部会の部長となった。すっかり特別活動の良さを忘れていた。久しぶりに特活に触れ、学級づくりとは何か、そのために何をすればいいのかなど考えることができた。今、若い先生方が増えてきているが、教科指導に比べると学級づくりは、なかなか教えてもらえず、意外にわかっていない状況である。ぜひ子どもたちが楽しいと思える学級や一人一人の所属感を高められるような学級を目指して特別活動の研究や勉強をしてはどうだろうか。

自分が20代の頃は、先輩の先生方からこんな活動をして良かったとか、校長先生からは学級歌を作って、こんな活動をした。今でも同窓会で会うと子どもたちが歌ってくれるんだという話も聞いた。昔は良かった的な話になりそうで、今はなかなかこんなことをしたという話もできないものである。

「TOKKATSU」が海外の国でも認められ、外国の教育システムに導入されるようになってきているそうだ。そもそも特活を実践している日本で、もう一度、その良さを見直し、いいものは継続していくことが大切ではないか。学級作りだけでなく、学校行事の充実、学校経営にも良い影響があると思う。



話の小窓

「ある日の資料室」

北塩原村立裏磐梯小学校長 村松 泰二郎
裏磐梯小学校の2階。階段を上がってすぐの場所に資料室があります。

先日、その資料室で昔の教職員名簿を見つけました。そうすると、自分が採用された年度の教職員名簿を探してしまうのは私だけではないはず。初任校が記載されているページを探します。すると、懐かしい先輩方や校長先生の姿はもちろん、当時担任していた児童の顔や、今では語るに堪えない自分の失敗エピソード、先輩に烈火のごとく指導された出来事が瞬時のごとく思い出され、思わず資料室に長居をしてしまいます。

また、改めて見てみると、現在の教職員名簿とは違い、年齢、住所、電話番号など、その個人情報が多さに驚きます。考えてみれば、当時は学級連絡網をつくるのも当たり前でした。卒業アルバムや卒業文集の最後のページは、先生や児童の住所や電話番号がしっかりと載せてありました。今の社会では信じられませんが、その当時はそれが普通だったのです。

世の中が加速度的に変化している中、自分もその変化に合わせてアップデートしていく必要があるのでしょう。ダーウィンも「唯一生き残るのは、変化に最もよく適応できる者である。」という言葉を残しています。ただ、いつの時代も変わらないものも存在します。それは、学校には「学びたい」と思っている子どもがいるということ、そして、教師の仕事とは、そんな子どもたちの資質や能力をまっすぐに伸ばしてあげることなのだろう……。そんなことを考えた、ある日の資料室でした。

雪の飯豊連峰



話の小窓

「潜在能力を信じて！」

西会津町立西会津小学校長 齋藤 勝芳
この秋、テレビ東京で放映されている「コーチ」(原作 堂場瞬一)がZ世代に好評を博している。警視庁人事二課から派遣された「冴えないおじさん(唐沢寿明)」が、挫折した若手刑事たちを的確なコーチングで成長させるという内容である。

部下より先に自分が行動してしまう刑事、取り調べが苦手な刑事、尾行が苦手な刑事などに、的確なコーチングをすることで自信をもたせて成長させていく内容は、これまでの刑事ドラマとは異なっている。

このドラマでは、ベテラン刑事からの熱い指導ではなく、自分の課題に気付かせ、解決策を探らせ、まるで自分が解決したかのように思わせるコーチングのテクニックが隠れている。ドラマを見てみると、効率よくかつ早期に解決させようとするあまり、指示を優先させてティーチングばかりする自分の指導を振り返ることができる。すぐにテクニックを教えれば、解決策の引き出しを増やすことにつながり、深い傷も負わないですむと考えてしまうが、それは、本当の成長には繋がっていなかったのかもしれない。コスパやタイパを優先する気持ちに伝えることと、一方的に指示することは同じではないのだ。

現代の世相を反映するこのドラマからは、「潜在能力を引き出す言葉」「挫折を乗り越える言葉」「マインドセット(心のあり方)する言葉」「人間性の成長を期待する言葉」を学ぶことができる。

潜在能力を引き出し、ともに成長を喜べる上司を目指していきたい。

< 編集後記 >

今年度、校長先生方、関係の皆様のご協力により、会報「耶麻」を無事に発行できましたことに、心より感謝いたします。ありがとうございました。

耶麻地区に赴任し、まもなく1年が過ぎようとしています。決断する難しさを感じながらも、校長会の「耶麻は一つ」というキーワードに支えられました。今後もよろしくお願いします。

令和7年度 耶麻地区小学校長会 広報部長

喜多方市立高郷小学校長 塩生敬久